
独り

叶星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独り

【Nコード】

N3155F

【作者名】

叶星

【あらすじ】

俺が任務から帰ってきたとき、それは俺の死すときだった。俺を失った瑛は独りぼっちで戦場を駆ける。

必死に手を伸ばした。

届いて欲しかったはずなのに。

届かない。

あと一歩なのに。

貴方に触れられない。

「俺あんッ！」

今は時間が嫌に緩やかに感じた。

酷く真っ白で、白か黒しか分らない。

まるでモノクロの世界にはまってしまったんではないかと想った。

精一杯伸ばした手は、服を掠っただけで、身体には触れられなかった。

そして、地面に崩れ落ちた。

俺は酷く息苦しそうに、だがそれでも笑った。

「瑛えい・・・泣かないで・・・任務・・・だっ・・・だから・・・ね？」

俺は任務から帰ってきたばかりだ。

瑛はただ、俺の帰りを待っていたのだ。

自然に、涙は堰を切ったようにぼろぼろと零れだした。

「じゅめっ・・・すぐ・・・止まる・・・っ・・・からっ」

俺の大きな手は瑛が一番大好きなものだった。
その手が瑛を撫でている。

瑛は、必死で涙を止めようとしたが叶わなかった。
逆にあふれ出してしまう。

「泣き・・・虫・・・だね・・・瑛・・・は・・・」

俺はくすつと苦笑していた。
それでも構わなかった。

しかし、俺は少しずつ衰えて、酷く冷たくなっていく。
瑛は怖かった。

「瑛・・・」

「何？俺」

「私が死んだ後、瑛・・・宜しくね？・・・」

「俺？・・・俺？」

俺はとても安らかに目を閉じ、死んでいた。

手は酷く冷たい。

何とも言いがたい絶望や哀しみばかりが頭を過ぎる。

涙は出なかった。

止まってしまった。

無言で、頬を拭い、笑った。

「お休み・・・俺・・・」

ただ虚ろな目は、庵を映してから、庵の身体をその場所に埋めた。

瑛は走る。

獣の如く、前を見据えて。

瑛は斬る。

庵の残した大切なものを抱えながら。

だが、その背中は孤独だった。

たった独り。

戦場にただ独り。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3155f/>

独り

2011年1月26日11時01分発行